

## お貞のはなし

昔、越後國新潟の町に長尾長生と云ふ人があつた。

長尾は醫者の子であつた。それで父の業をつぐべき教育をうけた。小さい時に父の友人の娘お貞と云ふのと婚約ができてゐた。長尾の修行の終り次第婚禮をあげる事に兩家とも一致してゐた。しかしお貞の健康のすくれない事が分つて來た。それから、十五の年にお貞は、不治の肺病にかかつた。死ぬことが分つた時、彼女は、わかれを告げるために長尾に來て貰つた。

長尾が彼女の床のわきに坐ると、彼女は云つた。

『長尾さま、私達は子供の時からお互にきまつてゐました。そして今年の末に結婚する筈でした。しかし今私は死にかかつてゐます、——これも神佛の思召です。もう何年か生きてゐましたら私は他人の迷惑や心配の種子になるばかりでせうから。こんな弱いからだではよい妻になれるわけはありません。ですからあなたのために生きてゐたいと願ふ事さへ餘程我ままな願でせう。私全くあきらめてゐます。それであなたも悲しまない事を約束して下さい。……それに私達は、又あへると思ひます。それをあなたに云ひたいのです』……

『本當だ、又あへるとも』長尾は熱心に答へた。『そしてあの淨土では別れると云ふ苦痛はない

のだから』

『いゝえ、いゝえ』彼女は靜かに答へた『淨土での事ではありません。明日葬られますけれども——この世で再びあふ事にきまつて居ると信じてゐます』

長尾は不思議さうに彼女を見た。彼の不思議さうにして居るのを見て、微笑して居る彼女を見た。彼女はおだやかな夢のやうな聲で續けた、——

『さうです。この世のつもりです——あなたのこの今の世です。長尾さま、……全くあなたもおいやでなければ。……たださうなるために私も一度子供に生れかはつて女に成人せねばなりません。それまで、あなたは待つてゐて下さるでせう。十五年、十六年、長い事ですね、……しかし私の約束の夫のあなたは今やつと十九です……』

彼女の臨終を慰めようと思ふばかりに、彼はやさしく答へた。

『私の約束の妻、あなたを待つて居る事は義務であり又嬉しい事です。私共は七生の間お互に誓つてあるのです』

『しかしあなたは疑ひますか』彼女は彼の顔を見つめながら尋ねた。

『他人のからだになつて、他人の名になつて居るあなたが分るかどうか疑はれます、——何か、しるしか證據を私に云つてくれなければ』彼は答へた。

『それはできません』彼女は云つた。『どこでどうしてあふか神佛だけが御存じです。しかしきつと本當にきつと、もしあなたがおいやでなければ私はあなたの處へかへつて來る事ができます。』

……それだけ覚えてゐて下さい』  
彼女はものを云はなくなつた。それから眼を閉ぢた。彼女は死んでゐた。

\* \*  
\* \*

長尾は心からお貞になつてゐた。それだけに彼の悲しみは深かつた。彼はお貞の俗名を書いた位牌を造らせた。そしてその位牌を佛壇に置いて、毎日その前に供物を捧げた。彼はお貞が丁度死ぬ前に云つた不思議な事について色々考へた。そして彼女の魂を慰めようと思つて、もし彼女が他人の體でかへつてくる事があつたら、彼女と結婚しようと思ふ眞面目な約束を書いた。この書附にした約定に彼の印を捺し、それを封じて佛壇にあるお貞の位牌のわきに置いた。

しかし長尾は一人息子であつたから、結婚する事が必要であつた。彼は家族の願に餘儀なく従つて、父の選んだ妻を迎へねばならなくなつた。結婚してからも續いて、お貞の位牌の前に供物を捧げた。そしていつも情け深く彼女を覚えてゐた。しかし彼女の姿は、彼の記憶から次第にうすくなつて行つた。——思ひ出し難い夢のやうに、そして歲月はすぎ去つた。

その歲月の間に多くの不幸が彼の身の上起つた。両親がなくなつた、——それから彼の妻と一人兒がなくなつた。それで彼はこの世界に只一人となつた。彼は淋しい家を捨てて悲しみを忘

れるために長い旅に上つた。

旅の間に、或日、——温泉とその周圍の美しい風景とのために、今も名高い山の村、伊香保に  
ついた。彼の泊つた村の宿で、一人の若い女が彼の給仕に出た。彼女の顔を始めて見て、未だか  
つて覺えない程の胸のとどろきを覺えた。それ程不思議にも彼女はお貞にそっくりなので、彼は  
夢でないかと、自分をつめつて見た程であつた。彼女が火やお膳を運んだり部屋をかたづけたり  
して、行つたり來たりする時——彼女の立居振舞は彼が若い時の約束の少女の貴き記憶を彼に起  
させた。彼は彼女に話しかけた。彼女は柔かなはつきりした聲で答へた、その聲の美しさは、あ  
りし日の悲しさで、彼を悲しくさせた。

それで彼は甚だ不思議に思うて、かう彼女に問うた、——

『ねいさん、あなたは昔、私の知つてゐた人にあまりによく似て居るので、あなたがこの部屋へ  
始めてはひつて來た時、びつくりしましたよ。それで失禮だが、あなたの郷里と名前をきかして  
下さい』

直ちに——亡くなつた人の忘れられない聲で——彼女は答へた。

『私の名はお貞です、そしてあなたは私の許嫁の夫、越後の長尾長生さんです。十七年前、私は  
新潟で死にました。それからあなたは、もし私が女のからだをしてこの世にかへつて來れば、私  
と結婚すると云ふ約束を書附になさいました、——そしてあなたはその書附に判を捺して封をし

て、佛壇の私の名のある位牌のわきに納めました。それで私歸つて参りましたの』  
彼女はこの最後の言葉を發した時、知覺を失つた。

長尾は彼女と結婚した、そしてその結婚は幸福であつた。しかしその後どんな時にも彼女が伊香保で彼の間に對する答に於て、何を云つたか思ひ出せない。なほ彼女の前世については何も覚えてゐない。その面會の刹那に不思議に燃え上つた——前世の記憶は、再び暗くなつて、そしてそれから後そのままになつた。

(田部隆次譯)

*The Story of O-Tai (Kwaidan)*